

## 幕末維新史の見方

神川, 彦松 / Kamikawa, Hikomatsu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

3

(発行年 / Year)

1959-10-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011861>

## 幕末維新史の見方

神川彦松

故藤井先生とは晩年七、八年間とくに開国百年記念文化事業会の関係で御懇意に願った。その御生涯を回顧するに、学者として模範的であつたばかりでなく、一個の人間としても内村鑑三先生が『後世への最大遺物』とされた「高尚な勇しい生涯」を送られ、まことに立派なものであつた。我々も及ばずながら藤井先生のとにならない学者としてのまた人間としての努力をかさねていきたいものである。

私の専門は国際政治史と国際政治学であり、その一部として日本外交史を研究し、近代史に関心を持つものである。外交史研究の根本資料として、外交文書の編纂が急務であるが、『日本外交文書』は既に七十冊ほど公刊し、今後も継続し、大正昭和へと進むことを期している。

幕末維新史に関しては、昭和五、六年頃から日本資本主義論争が、その研究を学界の正面に押出し、論争は戦後に引続いている。この問題に対する私の疑問は、歴史学の本質に関連する。即ち歴史学は科学であるかという問題である。新カント学派以来、歴史学は経験科学の一に数えられるが、歴史学は哲学と同様、その学問対象は漠然としており一面芸術との類似性さえ存する。歴史学の前提とされる「史観」は、要するに二大別して、理想的・概念的史観と実利的・実証的史観となるが、維新史の見方においても、唯物史観と王政復古史観とに大別できる。しかし何等かの前提を措いた歴史学では純粹科学とは云えない。純粹経験科学と応用科学とは区別されねばならない。私は社会科学の多くは政策論であり、応用科学であると考える。純粹科学と政策学を同一視しては科学も政策も共に発達しない。マルクス学派の学問が果して純粹な経験科学であるかは、反省を要する大きな問題であらう。マルクス・エンゲルスの学問体系は革命的戦略の実践理論であり、もとより部分的には経済学として通用するとしても、全体としては純粹経験科学となし得な



い。一九二七年テーゼ、三二年テーゼと戦略の変更に従いその理論も変化するので、唯物史観に基づく思想は、その本質からは科学に仮託された一個の政策論といえる。

歴史学は社会科学と同様、多岐に分化せねばならない。経験科学の分野では総合ではなく、分析を旨とするのでなければ真に科学的客観的な認識は成立たない。唯物史観の理論は経済史的に偏しており、政治、経済、法律、宗教、軍事は実際には不可分であるが、学問的には分割しないと認識できない。

幕末維新史は政治史を本流と考える。政治は人間社会の一切の闘争の集中的表現である。従来の歴史学では国内政治と国際政治両者の区別が判然とせず、今日まで主として国内政治面から研究されてきた。国内現象であると同時に、国際的現象の一つの場として観察しなければその真相は把握できない。幕末維新後の発展の分析には外交史的研究が肝要であるが、その研究資料としては、東大史料編纂所の大日本古文書『幕末外国関係文書』が三十冊ほど刊行されている他、外務省の『日本外交文書』は慶応三年十月十四日の大政奉還から現在に明治三十七、八年日露戦争当時の分まで公刊されている。外交史は日本に関する限り幼稚未発達の状態にあるが、これには史料非公開という制約があった。日本国際政治学会発行の季刊『国際政治』のうち「日本外交史研究」は明治時代、大正時代と出ているが、なお満足すべきものでない。

日本の幕末以降、近代史は近代欧米諸国と較べて、決してその価値は異ならない。ここに近代国際政治史を提唱する所以がある。欧米同様の発展、隆盛、行詰り、崩壊の経過は日本の近代社会の歴史も実に典型的にそれを証明しているといえよう。日本のみの特殊現象ではなく一面世界に普遍的なものと同様と絡み合う。この普遍特殊両面の追及こそ歴史の重点であり、またこれは私の四十年來、近代国際政治史研究の結論でもある。よって私は日本近代百年の外交史を、その観点に立って試みに著述した。これが「近代国際政治史における日本」と題する論文である。(『日本外交史研究』明治時代所収昭32)

日本の近代的発展を可能ならしめた条件としては地政学的、歴史的、民族的、国際政治史的諸与件があり、朝鮮、シナに比べて日本が異なった道を進んだのは、決して幕末において、故服部之総氏のいった「厳密な意味でのマニユファクチュア」が存したか否かという問題によるのではない。私は国際政治史的現象から、日本の通った発展段階を欧米諸

国と対照して、ペリー開港以来、日本の敗北に至るまでを次のように七期に分けた。

- 第一期 幕末開国時代——民族主義盛行時代（嘉永五年——慶応三年）
- 第二期 民族国家建設時代——帝國主義再開時代（明治元年——明治二七年）
- 第三期 帝國国家発足時代——欧州大勢転換時代（明治二八年——明治三七年）
- 第四期 帝國国家発展時代——第一次世界大戦時代（明治三八年——大正十一年）
- 第五期 帝國国家行詰時代——國際連盟時代（大正十二年——昭和五年）
- 第六期 行詰打開時代——ヴェルサイユ体制崩壊時代（昭和六年——昭和十三年）
- 第七期 帝國国家破局時代——第二次世界大戦時代（昭和十四年——昭和二十年）

遠山茂樹氏は著書『明治維新』において、明治維新史の研究のみでなく、その後の發展の統一的把握を要望されているが、まことにペリー来航から日本の無条件降伏に至る歴史的過程の全体から日本の特殊性の実態を究明することが必要で、これが外交史家の責務でもある。歴史的眞実を追究せねば眞の学問はなく、日本の海外發展もまた期し得ないのである。

法政大学史学会では、昭和三十三年十一月二十二日、法政大学第一講堂において故藤井菟太郎教授追悼の公開講演会を開催し、東京大学名誉教授神川彦松博士と名古屋大学教授大久保利謙氏に、夫々故教授の開拓された明治維新史の分野に関連する御講演を願った。こゝに掲げたのは神川先生の御講演要旨であり、意を尽さない所があるとすれば、筆記者がその責を負うべきものである。なお次に続く大久保先生の論文は、系統表と共に御講演草稿に加筆補正を賜ったものである。